

## ごあいさつ

2018年12月吉日

第10回記念JBFシンポジウム実行委員長  
佐野 善寿（株式会社サンプラネット）

遡ること7年前の2011年8月、産官学の志を持つ17名が発起人となりバイオアナリシスフォーラム（JBF）が発足し、同時に国内で初めてバイオアナリシスに特化した学術集会である第1回JBFシンポジウムが内外から200名以上の参加のもと開催されました。その後、JBFシンポジウムは毎年1~2回、BMVガイドライン案策定などJBFの活動報告の場のみならず、その本来の使命であるバイオアナリシス関連の議論と情報交換の場、そして若手研究者の育成の場として開催され、今般、2019年2月をもって第10回記念大会を迎えることとなりました。

この間、創薬研究をめぐる環境もドラスティックに変化し、抗体薬などの高分子やバイオマーカーの測定などの目的で測定装置や手法が大きく進歩するのみならず、バイオアナリシスを業とする研究者自身も内輪の議論にとどまらず周辺領域まで情報収集のスコープを広げ、自らのスキルや見識を弛まず向上させる革新を求められ続けています。

このような情勢の中、今回の第10回シンポジウムでは、~Open to the Public~をキーワードに、バイオアナリシスをとりまく周辺分野との実際的コラボを企図して、創薬を進めるために欠かせないパートナーである薬物動態、安全性、臨床薬理などの研究者と交流し、共通する課題を議論する企画を数多く用意いたしました。

またこれまでJBFシンポジウムで実施経験がなかった「ポスター発表の一般演題募集」も試験的に実施する予定であり、新進の若手研究者などが自らのデータを持ち寄り、来場者とポスターの前で議論する姿も見られることと思います。もちろん皆様にはずっと好評を博しておりますディスカッショングループ（DG）による1年間の議論の成果発表もご期待に応える内容となりましょうし、またそのポスター会場にはこの10回のシンポジウムを支えていただいた協賛企業様のブースも並び皆さまの好奇心を満たしてくれるイベントも用意しております。

このように、第10回の節目を迎えるこの機に、これまでのバイオアナリシスの専門的な深い議論に加え、実業務の研究仲間である周辺分野との議論や若手との議論にまでその活動世界を広げる、まさに~Open to the Public~を国内はもとより海外からも参加者を招いて展開します。会場も昨年までとは一新してパシフィコ横浜の広いステージで活発な討議を行い、皆さんの知恵を結集し、未来のバイオアナリシスのあるべき姿を描いて行けたらと想像を膨らませています。どうぞこの機を逃さずご参加とご議論を賜りたくここにご挨拶申し上げます。